

志田邸・東海道町民生活歴史館



町屋建築の他、関所手形、陣笠、挟箱、葛籠など江戸期から昭和前期までの生活関連品を入替え展示しています。

「現存する蒲原地区最古の町家」

志田家は江戸時代から東海道蒲原宿で米、油、塩、醤油等を扱ってきた商家です。元禄12年(1699)の高波被害により、蒲原宿は翌13年に東海道を海から遠ざけ現在地に移転。代々、六左衛門を名乗ったことから、屋号は「やま六」、醤油名も「やま六醤油」でしたが、昭和21年(1946)の農地改革までは米作農家でもありました。

主屋は安政元年(1854)の大地震で被災し翌2年に建て直された蒲原地区でも最古に属する町家で、木造2階切妻造り瓦葺き、厨子2階へは箱階段で上がります。間口3間半、奥行7間半で、店の間、中の間と居間2部屋が1列で通り土間に沿う形式の、典型的な縦列型町家で、他に厨房と五右衛門風呂、雪隠等が繋がっています。平成13年(2001)に志田家住宅主屋として国登録有形文化財に選定されました。

西側の明治20年代に増築された平屋部分は間口3間、奥行5間で、奥座敷2間、他に廊下伝いの手洗いがあります。

庭奥には石造りの農機具蔵、家具土蔵と天保13年(1842)竣工の木造醤油醸造場が現存しています。

「江戸後期～昭和初期にかけての『一般町民の生活用品』の展示」

東海道町民生活歴史館は志田家醤油製造場(工場)・土蔵等をそのまま展示場として活用し幅広い勉強が可能な、全国的にも珍しい資料館です。江戸期建造物の内外部に、江戸後期から昭和初期にかけて「志田家で使用された衣食住を始め、商工農、年貢・税、教育、旅・娯楽、徴兵等の生活関連品」を中心に展示・解説。宿場時代に使用された棹秤、寺子屋教科書、貨幣などを活用し、計量・地理等の体験授業等を行っています。



「部戸(しとみど)」

外が透けたこの窓は「部戸(しとみど)」が使われています。平安時代に開発された雨戸の一種で、寺社では外側に開け、町家では上2段を折り畳んで内側の天井から吊るします。

町家建築の他、関所手形、陣笠、挟箱、葛籠、など江戸期から昭和前期までの生活関連品を入替え展示しています。



復刻した志田邸の醤油ラベル。レトロな感じが味を出しています。